

<平和について思うこと>

第1部 平和祈念文集

<平和について思うこと>

戦後70年に想う

赤崎 とよ子（南新木 在住） 1942生

リモコンのボタンひとつで外出先から家の中の操作が出来、宇宙旅行が夢でない時代が来た。鉄腕アトムや銀河鉄道など、アニメの世界が夢でなくなった。小学生から老人まで携帯電話を持ち歩き、私など、その携帯電話にやっと慣れてきたと思ったら、スマホとか、タブレットとか、小型携帯パソコンみたいな機器が現われ、世界中と繋がるネット網が出来上がっている。日進月歩、怖くなるほどの技術革新が進んで、一体、この先、世の中どうなっていくんだろうと思う程のめざましい進歩を遂げている。

1942年、戦中に生まれた私は、電気も冷蔵庫も炊飯器も洗濯機もない時代に幼少期を送った。かまどで火を燃やして炊いたご飯、井戸水を汲んでタライに入れ、洗濯板と固形の石鹼でゴシゴシと手洗した時代。つるべ井戸から水をくみ上げ、何回も何回もバケツで運んで風呂桶を一杯にし、火吹き竹でフーフーやりながら薪^{まき}を燃やしてお風呂を沸かしたこと等、今は只、懐かしいの一語に尽きる。

娯楽と言えば、ラジオか映画しかなかった。ザーザーと雑音の入るラジオに耳をくっつけるようにして聞いた「新諸国物語」など、今でもハッキリと覚えている。校庭に白い幕を張って映画会も開催された。風があるとゆらゆらと幕が揺れて映像も揺れ動き、幕の後ろ側からも観ることが出来た。今、冷暖房の行き届いた映画館で、ゆったりとした椅子に身をもたせながら3Dの眼鏡をかけて飛び出す映像を見ていると、貧しさの中から這い上がる人間の力には、驚くほどのエネルギーが隠されていることを痛感させられる。

戦後70年、台所事情一つ取り上げても、全てが電化され、タイマーをセットして出掛ければ帰ってきた頃にはご飯が炊けていて、冷凍保存が何の違和感もなく日常の中に溶け込み、温めや解凍が瞬時にして出来る電子レンジも今は当たり前になった。洗濯物もしかり、ボタンひとつで洗濯から乾燥まで、雨の心配もなくやってくれる。一家に一台だってすごいと思われた車が、今や一人一台が当たり前になった。そして人間の背番号のようになった携帯電話な

しでは夜も昼も明けなくなっている。

豊かさや便利さは生活に潤いと余裕を持たせてくれる貴重なものに違いないが、大切なのは、その豊かさが当たり前だと思っはならないことだろう。全てが電化された世の中、一旦何かが起こって停電になったら一切身動きが取れない怖さも控えている。貧しさがいい訳ではないが、貧しさを知った上での豊かさと、貧しさを知らぬままの豊かさに溺れている違いは大きい。

貧しさの中にあればこそ生まれる知恵や工夫もある。我慢することがあればこそ、叶えられた時の喜びの大きさや感動がある。今や子供部屋があるのは当たり前で、自分の見たいテレビが誰に邪魔されることもなく観られ、茶の間から団欒だんらんが消え、家族が肩寄せ合って過ごす時間が少なくなってきた。世の中全てがスピード化され、速ければ良しの風潮がある。物事がスピード化されれば、その分、時間的に余裕ができるはずなのに、人はますます忙しく動き回るようになってしまった。

たまに列車の旅をしていて、緑豊かな田園地帯を走っている時、煙がたなびいているのを目にすることがあるが、何だかホッとする。煙には生活があり、安らぎがあった。「ああ、ここには人間の営みがあるんだなあ…」って思えるからだろう。今や日常生活の中で煙がたなびく風景なんて目にすることは殆ど無い。家の敷地から煙が見えたら消防署に連絡が行って注意される時代だ。チョロチョロと燃える火を見つめながらご飯の炊きあがるのを待った時代、煙に安らぎを感じるのは、火を燃やさなければ炊事は成り立たなかったことを知っている世代だけなのかもしれない。

戦争体験者がだんだん少なくなっている中で平和の存続と危機が語り継がれている。人として生まれてきた命を、人と人の殺し合いの為に費やす人生なんて余りに虚しすぎる。勝っても負けても何一つプラスになることはないのが戦争だ。それなのになぜ人間は戦争を止めないのだろうと素朴な疑問だけが宙に浮かぶ。

縁あって昭和という時代に生まれ、貧しさと豊かさの激動の中で生きてきた私は3歳で終戦を迎えたことになるが、戦中生まれとはいっても余りに幼かつ

第1部 平和祈念文集

<平和について思うこと>

た為か戦争の記憶は殆ど無いに等しく、幼心の記憶に覚えているのは、まだ砂利道だった今の国道356号線を、キャタピラーをつけた戦車の様な車がジャリジャリと音を立てて通り過ぎるのが怖くて、隠れて見ていたことや、戦争で手足を失った傷痕軍人が、白い服の姿で街角に立っていたことを思い出す。

多くの犠牲者の上に今の豊かさがあることを忘れてはならない。豊かさがもたらす危機感が世界を騒々しくしている。今、目の前の現実だけを見ている限り、この幸せな日々のあることが奇跡なのかもしれない。

今やボタン1つで地球が壊滅する恐ろしい核の時代。平和ボケしている今の世の中、一步間違えばとんでもないことになる危険性が潜んでいることを、もう一度改めて考えてみる時ではないだろうか。終戦後の焼け野原から立ちあがった人間の強さを、今度こそ平和の目的のために使うべき時が来ている。歴史は繰り返されると言うが、間違っても戦争だけは繰り返してはならない。

平和維持はエネルギーを要する

榎本 龍生 (布佐 在住) 1952生

昔、「巨人、大鵬、卵焼き」という言葉がありました。その当時の多くの子供たちが、野球なら巨人ファンであり、相撲は横綱大鵬、食べ物は卵焼きが好きだったのをあらわしたものです。私の周辺でも(大人の話)、巨人ファンが多く、度々「今日は勝った？」といきなり聴かれたものです。「今日勝った？」かは、「今日巨人は勝ったか？」との問いかけで、誰もが巨人ファンであるとの前提での会話になります。格別に巨人ファンでも無かった私は、最初は何を言われたのか解らず、やがては野球の試合結果であり、巨人戦の話と解り、「観てないから知らない」と答えを濁していました。野球と言えば巨人、巨人と言えば皆がファンが当たり前の中で生きるのは大変で、巨人以外のチームを応援するには、勇気とエネルギーが必要でした。ところで、親が子を思い可愛がるのは至極当然で、無意識の行為と言えます。しかし過ぎれば溺愛できあいを招き、良い結果を

生みません。その為には理性を働かせ、程よい厳しさがが必要です。本能を押さえ、厳しさを貫くには、それなりの意志とエネルギーが必要です。そして、戦争の被害体験は多くを語りますが、加害体験は口を噤むのが大半です。加害があつて、被害がありますが、本来あるべきはずの加害体験を語るのは、勇気と、エネルギーを要します。

さて、今の日本が平和であることは誰もが認識し、疑う余地がありませんが、その平和とは何なのか？、平和な社会がずっと続けられるにはどうしたら良いか？、何もしないのが平和か？、平和の維持はどうしたら良いか？、平和とは「戦争しないこと」と言ってしまうえば、いとも簡単ですが、平和維持には「どうすればよいか？」にはいろいろ論議がなされます。「軍事力で平和を維持する」を主張するのが、最も楽な、安易な方法に思えます。「武力で攻められたらどうする？」の答えは「武力で跳ね返す」が最も当り前な方法で、楽な考え方です。どこかの国が核実験をした、どこかの国が攻めてきそうだとわれれば、危機感をもち、或いは危機を煽り、軍備で対抗しようとするのは、実に簡単な、楽な対応です。軍事力が国民生活を守る。平和の維持には武力が必要と主張するのは、人の琴線きんせんを刺激し、楽な態度と言えます。時として、イデオロギーが高まると、武力闘争になりがちです。イデオロギーに染まり、イデオロギーの中に居れば、とても楽です。武力に頼ろうとするのは、とても楽で、考えるエネルギーは少力で済み、余り考えないからこそ安易に武力に走って仕舞います。しかし、先の大戦で、「武力の行使が国民を守つたらどうか」を問うたら、答えは否であろう。南の島の玉砕、沖繩戦、空襲、広島、長崎等々多くの国民が死に、国民だけでなく相手国にも数多の被害を与えました。70年経った今も、後遺症に苦しむ人が多数います。軍事力は自己陶醉を生み出し、武力を振り回したくなり、自分も相手も傷付くことになります。よくよく考えれば、武力が平和に繋がるかは、かなり疑問と言わざるを得ません。

「武力に頼らない平和」を希求するのは、簡単なことではありません。戦争にならないようにはどうしたら良いか？、どのような外交が必要か？、国民はどのようにすべきか？、思うだけではなく、実行しなければなりません。「平和、平和」と叫ぶだけでは「平和は来ない」のは当たり前の事であり、「平和は自分

第1部 平和祈念文集

<平和について思うこと>

の手で掴む」が本当であると言えます。「武力で国を守る」より「武力に頼らない平和」は、より難しく、何倍もの努力、エネルギーを要します。武力には武力と言うエネルギーが必要ですが、質は違うものの「武力に寄らない平和」維持は、それ以上の努力、知恵、エネルギーが必要と言うことです。そのエネルギーの具体例は何か、今ここで述べる事は出来ませんが、安易に流される事なく、立ち止まって考える事も必要です。話しを飾ったり、本質を隠したりしないで、本音で国民皆で話し合い、黙っていても平和は来ない事を認識すべきです。

エネルギー量や質は違いますが、平和維持は「武力に頼る」か「非武力を貫く」か、どちらが良いか、それを考え実行するのが大切です。「巨人、大鵬、卵焼き」のように、安易に体制に寄り添えば楽です。「悪貨が良貨を駆逐する」ではありませんが、悪貨（安易）が良貨（難易）を駆逐するとしたらどうなるでしょう。先の大戦の様に、多くの人々が苦しむだけではないでしょうか。即ち、「武力に頼らない平和」は、多くのエネルギーを使ってでも、求めるべきものではないでしょうか。私達人間は、楽な方へ、楽な方へと行きがちです。「楽あれば苦あり、苦あれば楽あり」平和は苦勞の先にあると考え、日々を過ごそうではありませんか。

『癒される時を求めて』に辿りつくまで

海津 にいな（つくし野 在住） 1953年生

第2次世界大戦(太平洋戦争)において、日本人の戦没者数は310万人、その中で、軍人軍属の戦没数は230万人とされている。当時は治安維持法により、弾圧・粛清された人もおおい。(GHQの指示で法制が廃止されたのは1945年10月4日) 敗戦直後の9月では東久邇内閣が発表した陸海軍人の戦没者数は50万7,000人であった。明治維新から軍国主義に突き進んだ大日本帝国は、人命を軽視し、負け戦は伝えまい、認めまいという風潮であったと数字が物語っている。

新憲法のもと、主権を取り戻した日本は、戦没者援護法を制定し、戦没者の調査が進むようになったのは、「もはや戦後ではない」と言われるようになった昭和30年（1955年）からなのかと思う。GHQの占領で制限された広島、長崎の爆弾についても、「原爆」であったことが口外できるようになった。占領下の報道規制（War Guilt Information Program、略称：WGIP）の影響も徐々に解かれた。

戦没者「軍人・軍属・准軍属」の230万人として、厚生省が数字を出したのは1977年になってからだった。外地での戦没、一般邦人30万人、内地での戦災死者50万人、計310万人となったのだった。（なお、調査や遺骨収集はまだ不十分であり、概数にすぎない。）

この戦争における日本軍の戦闘状況の特徴は、補給路の途絶により、食物不足から栄養失調のために体力を消耗して抵抗力をなくし、マラリア、アメーバ赤痢、^{せきり}デング熱その他熱帯に多い病^{やまい}による多数の病死者を出したこと、^{きが}飢餓によって起こる餓死者が多いことだ。むしろ、戦病死者の数が、戦死者や戦傷死者の数を上回っているという。それが特殊な状況でなく、あらゆる戦場で発生した。民間人の大量自決をもたらしたことなどが、反省されるまでには時間がかかった。「戦勝報告」ばかりを新聞、ラジオに躍らせた日本軍の責任は、国民からどう問われるべきだったのか。そうした関係者は口をつぐんで鬼籍（死者の籍）に入ってしまった。過去の美化、^{かいこ}懐古（昔を想う）する記録として勇ましく語る人も出てきて、事実とは違う数字についての論争に発展するなど^{しゅうしゅう}収拾もつかない時期が長く続いてきた。

辛い、忌まわしい記憶は消し去りたい、まして徴兵によって多々の人々が犬死であったなど孫子に伝えたいとは思わない心情も加わる。戦中、戦後のしばらくの時期には^{えいゆうたん}英雄譚（英雄物語）、ドラマティックな話には聴衆、読者もついてくるが、血なまぐさい^{せいさん}凄惨な死、^{しかばね}屍の累積する戦場などを耳にしたくなかったのは時代的な感情もあったのだろう。しかし、事実を見た者が語り伝えなければ想像する事も遠のき、忘れ去られる。私も日本軍の戦没者の過半数が戦闘行動による死亡ではなく、莫大な数の兵隊の餓死者であったという事実を知らないでいた。戦争末期、艦船が壊滅状態で兵士の^{ひょうりょう}兵糧（食糧）が途絶え、

第1部 平和祈念文集

<平和について思うこと>

多くはマラリアに感染し、飢餓地獄の中で野垂れ死にした。人肉までも食べる状況があったのだとの悍ましい事実も語られている。

私の父は二度の徴兵をうけ、最後は体を壊して野戦病院で終戦になり、捕虜収容されたという事だけは聞いた。生き残った兵士は、亡くなった戦友に対して「死ねなかった」か「死ななかった」と自問自答しなければならなかった。ニューギニアで9割の兵士が亡くなったという「英霊（戦死者の霊）」の実態には知らないでいた。戦争末期、拙い英語で食料調達に行き、現地の酋長に助けられて恩義に感じていたという話を父から聞いた。戦争が終わったら、必ず日本を案内すると約束したのだと子供だった私に面白おかしく話して聞かせてくれた事があった。実際に、帰還した戦友たちがお金を集めてオリヤスという酋長を招待して、日本のあちこちを案内してお礼の宴を設けたという。そして、喜んだオリヤス氏は当時に日本兵から習い覚えた「日の丸」の歌を披露し、一同を驚かせたというエピソードを聞いたことがある。

しかし、父は夜中にうなされて、大声で飛び起きることが度々あった。まったく不明な言動をすることがあった。ある時、偶然にNHKの特別番組で泰緬鉄道の捕虜だった記憶を語るE.ローマックス氏（英国）の事を知った。番組ディレクターが資料として持っていたローマックス氏の著書『泰緬鉄道 癒される時を求めて』を贈呈された。父の心理状況と似ており、今でいうPTSDは兵士も悩まされたことを知るに至った。家族をも受け入れがたい症状は、日英の兵士も共通だった。亡くなった父を理解し、心の「和解」に至るまで非常に長い年月がかかった。戦争が終わっても、それぞれの傷は心にも残る。戦争の風化、まして雄々しく美化するなどはあってはならないと思う。

戦後70年に平和を考える

郡山 琴美（並木 在住）1997年生

私は、今から5年前に派遣中学生として広島を訪れた。青い空が広がり、じりじりと照り付ける真夏の太陽。かつて、この地で惨事が起きていたとは思え

ないほど豊かな自然が広がっていたのを覚えている。現地では、被爆者の方々からの貴重なお話や資料館の展示物から、当時の悲惨さを目の当たりにして衝撃を受けた。特に、被爆体験を伝えていきたいという被爆者の思いや資料館での、皮膚が焼けただれた人間のジオラマ、熱線により石段に焼き付いた人の影は、今でも忘れられない。

派遣後、私にも平和の大切さを伝えていくためにできることがあるのではないかと思います、我孫子市平和事業推進市民会議委員の一員として活動させていただいている。この事業を続けていく上で、私自身も平和に対する思いが変化してきている。派遣時には、戦争の悲惨さを知り、二度とこのような悲劇を生みだしてはならないということを、自分の中で心に刻んでいた。しかし、今となっては、その思いを私からも後世へと繋げていきたいと感じている。心の中で平和を願うことももちろん大切な事だが、行動に移していくことに意義があると思うのだ。私達が次の世代にも平和の大切さを、「伝えていく」。そして、平和とは何か、どうしたらみんなが平和になれるのかを考えていく。戦争を知らない世代だからこそ、過去の歴史を伝えていく必要があると感じている。

その第一歩として、今年は戦後70周年事業の一つであるリレー講座を、市内の小学6年生を対象に行った。歴代の派遣中学生達が、原稿や資料の作成・準備に励み、子供たちと一緒に「平和」について考える。純粋な気持ちを持つ子供たちにどうしたら戦争の悲惨さを伝えることができるのだろうか、どうしたら原子爆弾の恐ろしさを伝えることができるのだろうか。歴代の派遣中学生たちが、それぞれの思いとともに授業を行った。

リレー講座を終えて、私はこれからも多くの人に「伝えていく」ということが大切なのだと感じている。小学生だけに限らず、世界の人たちにも広島や長崎で起きたことを知ってもらいたい。そして、平和な社会を築いていくために一人一人ができることをきちんと考えてほしい。戦後に生まれ育った私たちは、何一つ不自由なく生き、大切な人たちと一緒に過ごすことができる。しかし、そんな当たり前の生活が築かれるまでには、多くの人々の力と時間が費やされていたことを忘れてはならないし、これからも永遠に平和な社会を維持できるよう努めていく必要がある。時が経つにつれて、被爆者の方々の高齢化が進む中、

第1部 平和祈念文集

<平和について思うこと>

戦争の苦しみや憎しみを直接聞くことができるのは、私たちの世代が最後かもしれない。過去の戦争でお国のために命を懸けて亡くなられた方々、今でも様々な思いを胸に生きている方々がいることを、決して忘れてはならない。

戦後70年を迎えた今日、日本では戦争を経験していない世代が、全体の約8割を占めるといふ。今こそ過去の歴史を振り返り、平和の思いを未来へ繋いでいくべきではないか。いつか世界中の人たちが、心から平和だと思える日を願って……。

私の名付け親、幸治叔父さん

越岡 禮子（寿 在住）1942年生

私の名前は、戦死した幸治叔父さんが付けてくれた。叔父は父の次弟である。禮子という名前は平成の人には難しいようで何と読むのかと度々尋ねられる。「れいこです。祭りの提灯に書いてあるあの字です。」などと説明をしている。堅いイメージで大雑把な性格の私には過分で恥ずかしい。

私は叔父のことは何も知らない。私が四歳の時、私の両親は父の実家、つまり私にとって祖父母達と別居して戦後間もなく川崎へ移った。祖父母達は疎開先の前橋から都内に戻ることはなかったから叔父の短い生涯を聞く機会はなかった。私の実家に残る数葉の写真に、「これが幸治だよ」と父が指さす若者は穏やかな笑顔の好青年である。無口だった父は思い出話などをすることはなかったが、叔父が実業学校を卒業直後に出征したことや、昭和十七年十月に中国の四川省で特別攻撃の命を受け、二十三歳の若さで戦死したことなどを語っていた。

その叔父が父と初めて身孕みごもった母あてに、「もし、女の子が誕生したら禮子と名付けて欲しい」と戦地からの手紙に書いてきた。昭和十七年春の頃と聞く。私の名付け親の由縁だ。死を覚悟していた叔父は新しい生命に恋人の名を託し、自身の想いを込めたのだろう。「幸治叔父さんの恋人ってどんな人だったのかしら」と時々思う。祖父は明治の教育者の下田歌子女史に大変心酔していたので

長女に「歌子」と名付け、次女になる叔母共々、下田女史が創立した実践女学校で学ばせた。叔父の恋人もこの女学校に在籍していたのかしらなどと思い、勝手に優しくてたおやかな美しい人、などと想像をふくらましている。

戦争がなく平和の時代であったなら、二人は結ばれて子供や孫に囲まれて幸せな家庭を築いていただろう。存命なら今年は九十四歳かと思う。爆弾を抱いて敵地に飛び込む決死隊であったことから戦功により、今、多摩霊園の軍人墓地に叔父は永遠の眠りについている。彼岸や盆に甥や姪にあたる私達が時々墓参りをしているが、いずれ近いうちに子供を残すことのできなかつた叔父は皆から忘れられてしまうだろう。私は飯田橋あたりに用ができると何時に限らず靖国神社に祭られている叔父を詣でる。私が叔父に敬慕の気持ちを抱いている間は叔父の存在があったということなのだから。そして世界の平和を願ってくる。

幸治叔父さんに感謝していることが他にもある。私と私の夫との出会いは叔父の二十七回忌の法事の席での親戚同士の世間話の中から生まれたものだ。私が幸せな今の生活を過ごしているのは叔父からの賜物なのだ。

私には三人の若い孫がいる。今年の国内では安保法制でもめている。ぜひ三人の孫達の将来に、戦争で苦しむ時代が来ることがないようにと祈るばかりだ。

小説「黒い雨」と戦中派の想い

竹生 昭（東我孫子 在住） 1928年生

この夏、井伏鱒二の小説「黒い雨」（新潮文庫、1970）を再読した。同小説は1989年に今村昌平監督によって映画化されており、当時、田中好子の演技に感激したことを思い出した。大学卒業後、自分と同期入社した新入社員に広島市出身の〇君がいた。同期数十名の中で営業部に配属されたのは4名のみであり、彼とは仕事を通じてすぐに親しくなった。あるとき、2人で泊まりがけの温泉旅行に行き、風呂に入った。裸になった〇君は、「俺の肌を見ろよ」といった。黒色の痣が彼の全身に点々として^{あざ}いるのに驚いた。〇君は広島市で

第1部 平和祈念文集

<平和について思うこと>

原子爆弾に被災し、爆心地からは少し離れていたが<黒い雨>を浴びたとのことであった。風向きによっては爆心地近くでも、<黒い雨>を経験しなかった人もいたとのことであった。

○君とは、その後親友として付き合いしていたが、あるとき彼から「太く短く生きる」という言葉を聞き、被爆者の覚悟の強さに愕然とさせられた。また、彼は「俺は一生結婚しない」と繰り返していた。彼は旧制中学時代に硬式野球の捕手を務め、スポーツと学業を両立させたといっていた。その後、○君は会社とのトラブルがあつて辞職し、準大手の建設会社に職を得た。退社後も暫くは酒を酌み交わす機会があつたが、徐々に疎遠となつたことが悔やまれる。昭和31年に自分が結婚したとき、○君からは栗の木を^く割り抜いた火鉢をお祝いとして贈られた。今でも正月にはその火鉢を出して、○君を偲んでいる。既に鬼籍に入られていると想像するが、被爆者となつたことの悲しみと不運に同情を禁じ得ない。それもあつて、鹿児島県川内原発（九州電力）の再稼働開始のニュースには複雑な思いがある。東日本大震災による福島原発（東京電力）の事故処理も、まだ途遠しの状況にある。核のごみである放射性廃棄物の処理方法も解決されていないにもかかわらず、原発の再稼働を行うことに対して、私は強く反対する。

昭和20年8月15日、雑音で聴きとりにくい玉音放送で敗戦を知った。日本帝国の不敗神話を信じていた身には、^{にわか}俄には受け入れられないという周りの雰囲気であつた。進駐軍による占領政策、軍国主義から民主主義への急速な思想の転換、食糧の欠乏が、当面の国民一般の不安材料であつた。当時、私は17歳。ほつとした心境で終戦を迎えた。昭和18年に学徒動員され、東京の千駄ヶ谷から埼玉県蕨市に疎開させられ、沖電気の軍需工場で旋盤工として働いた。ベルトに右手を挟まれ、中指の爪が剥がれて化膿性爪囲炎となり、名誉の傷跡として残った。東京空襲から帰投中の米軍爆撃機B29から、蕨市にも焼夷弾と1トン爆弾が投下された。仏壇などの貴重な品物は、火事場の馬鹿力で運び出すことができた。東京の空襲に比べると、被害は比較的小さくてすんだ。

旧制中学時代は殆ど勉強しなかった。学校では配属将校が幅をきかせており、特攻（予科練）を受験するように、とくに体育系の生徒に対して奨励していた。私は病弱のため免れたが、数名の同級生は特攻を志願した。自分の国を守ることは必要だが、現在国会で審議中の「安保関連法案」は憲法違反であり戦争への道を拓くので、私は反対である。理想をいえば、世界各国が戦争放棄の条文をもつ憲法を制定することであろう。敗戦から立ち上がり、繁栄した今日の日本を構築した日本人の勤勉さを誇りに思うと同時に、戦争の記憶を風化させないことを望みたい。

馬齢を重ねて戦後70年を迎え、87歳の今日に至った。毎年8月は、広島、長崎の原爆記念日、終戦記念日、更にお盆がある。今年の8月12日は妻の17回忌だったので、とくに印象深くかつ暑い夏であった。戦後の食糧難の時代を経験した私は、現在でも一粒の米を大切にしている。後期高齢者になり趣味は少なくなったが、下手の横好きで囲碁を楽しんでいる。今後も政治、経済、文化などに対して、個人的な関心を持ち続けたいと願っている。また、次代を背負う若い人達には、立派な国造りの夢を託して止まない。

終戦70周年の秋に思うこと～地上の平和を願って～

富岡 譲二 [本名：三田 譲] (中峠 在住) 1941年生

学生5年目に東京オリンピックがあり埼玉・戸田ボート場でロシア語の通訳を務めた。到着したソ連選手団の表情は硬く事務局や私も緊張した。史上初のオリンピック3連勝を狙うソ連シングルスカル選手のボートが木箱こんぼうに梱包され開催地の戸田市に到着し開梱、大きく破損していた。ソ連チームは「これは日本の陰謀いんぼうにより故意に破損された」と強いクレーム。修理は予選会には間に合わなかったが敗者復活戦で勝ち残り、修理されたボートでこの選手は結局優勝。亡命者も出ずに競技は無事終了、ホッと。

卒業後暫くして航空会社のモスクワ支店転勤となり、幼い子供を連れて数年

第1部 平和祈念文集

<平和について思うこと>

駐在生活を送った。11月革命記念日の前日、勤務を終えて一人車を運転クレムリン近くまで来ると突然交通警官から停車を命ぜられ、脇道へ入り隊列が通り過ぎるまで待つようにとの指示。乗用車が日本製のため防衛上脇の道路に誘導されたとは思わないが、密かに隊列を見ると巨大な大陸弾道弾ロケット、戦車が薄暗闇の中通過して行った。翌日のパレードの為の移動であるが、この国とは絶対戦争をしてはならないと強く思った。その後ソ連は崩壊、ベルリンの壁も崩れた。これほど早くその日が来るとは予想しなかったが、人間が求めるものは軍事力や言論統制ではなく、知る権利、言論の自由、他国との自由な交流、食料だと確信した。

ロシア駐在から10年経た頃、戦後初めてのパラオ行きチャーター機が小・中学生グループを乗せて成田を飛び立ち、私は添乗した。空港には多くのパラオの人々が両国の旗を振って出迎えて呉れた。今年4月平成天皇は慰霊の旅をされ、パラオ空港では多くの人々が両国の国旗を振る光景をテレビで見た。それは子供達と訪れた時の光景と重なった。私の親父も日本がポツダム宣言を^{ざし}座視した直後の昭和20年7月29日、美しい海の国パラオで亡くなっていた。今夏8月15日は敗戦70周年、例年にない程、第2次世界大戦前後の日本の行動、戦争・侵略等、新安保法案もからみ、国会、新聞テレビ他で色々と議論された。ご存じ中国は第2次大戦まで列強と言われる国々に植民地化されたが、経済復興を図り現在では米国と並ぶ世界最強の国家を目指し海洋進出にも力を注いでいる。朝鮮戦争後半島は南北に分断、欧州で留學生活を送った新指導者は斬新な政策を導入、「普通の国家」に変革するかと期待されたが世界にも^{まれ}稀な世襲指導の下、極東地域は今も緊張が続く。

海外での生活はソ連時代のモスクワ、オリンピック後のソウルに駐在、航空会社や旅行会社に勤務、外国を訪問する機会にも恵まれた。どの国も戦後の日本や日本人への評判は良く、日本人に生まれて良かったとの思いを強く抱いてきた。理由は勤勉、約束を守る、他人への思い遣り^やと優しさ、友好的国民性、平和国家であるからだろう。定年後は10年間大学の観光学科で^{きょうべん}教鞭を取り留學生も中国、韓国、ロシア、タイ、ベトナム、フィリピン他多くの學生に触れた。各々に出身国独特の国民性を感じたが皆日本に憧れを持って来日している。

私は戦争史の専門家ではないが、相手国への不信感や恐怖心、宗教争い、領土占有、仕返し等の理由から戦争、侵略や紛争が始まっている。防衛は必要だが、アジアの近隣諸国との善隣友好の時代を早く築きたいものだ。災害復興や日々飛び交う情報入手等は急ぐ必要があるが、外交は余り急ぎ過ぎないことだと思っている。侵された方は何時までも記憶に留めようとする、侵した方は早く忘れようとするのが常。「遠くの親戚より近くの」との言葉もあるが遠くの国との交流も大切だが、近くの国との緊張緩和と友好関係が重要。戦後70年が過ぎたが人間の英知で少しでも穏やかな極東・アジアを築きたいものだ。

あわや第3次世界大戦かと危惧^{きぐ}したキューバ危機から約60年、米国・キューバは国交回復。冷戦下、大陸間弾道弾開発で争った宇宙も最近では米・ロ・日他で共同開発を進めている。息子夫婦はJICAメンバー等でアジア、アメリカ、中東で青少年のサッカー指導やユニセフ事業に10年程携わっている。渡った国はバングラデシュ、スーダン、インド、ヨルダンなど。地道ですが平和への小さな国際貢献だと思っている。先般総理の終戦70周年の談話が発表され様々なコメントや批評が出たが文章表現として（私は）概ね肯定的である。しかし大切なのは実行と行動力。9月3日の中国抗日勝利記念日の軍事パレードを見る限り、以前目にしたソ連時代のミサイルや戦車隊より性能は格段に向上していると予測され怖さを感じる。平和の構築は複雑な国際情勢が絡み難しい。しかし今春関係改善を目指し日中韓3国協力フォーラムが開催され、観光関係者訪問を中心に交流団3千人が中国を訪問するなど地道な交流が始まった。歩みが遅くとも確^{しか}りと築き上げることが大切。今秋予想される3国の首脳^{しゅぶ}の英知により良い結果に向かうよう期待したい。国家に加え人々の文化、スポーツ、観光等を通じ、相互交流と理解の構築も重要。笑顔が増え、涙が薄れ、全ての人々が楽しく語れる日が早く訪れますように。終戦70年の秋に感じ、思ったことを書かせて頂いた。

戦争と平和について思うこと

仲條 拓躬（船戸 在住）年齢不詳

本年は戦後70年という節目の年です。戦争を体験している方も少なくなってきました。アジア諸民族の共通理解にとって大切なことは、欧米白人による搾取^{さくしゅ}、精神的、文化的、経済的な独立ということです。歴史を振り返り、もし白人諸国家の勢力拡大・植民地支配がアジアに及ばなかったら、アジアはもっと別な形で平和的に共存していたことでしょう。

17世紀初のイギリスのインド侵略、19世紀末の中国のアヘン戦争など、欧米諸国家によるアジアの植民地獲得競争は、否が応でも日本を独立維持のため軍事優先国家^{へんぼう}に変貌させました。もしも日本が抵抗して、戦わなかったら今頃アジアは白人の奴隷として自由を奪われていたことでしょう。

中国や韓国及び無意識の歴史を学ぼうとしない日本人は、白人社会のマインドコントロールから脱して自らの想像力を働かせるべきです。世界史の本質とは、400年間に渡ってアジア、アフリカそして南北アメリカ、すなわち全世界が、白人帝国主義によって奴隷化されてきた歴史と言っても過言ではありません。

中国・韓国の両国と日本も、長く同じ漢字文化圏として互いに争わず共存共栄してきたものを、不幸にして19世紀以来、白人諸国化の共同戦略によって互いに憎み合い、争うように仕向けられてしまいました。この状態は戦後70年を経てもなお続いています。今でも基本的には、白人によるアジア侵略支配の構図は変わっていないのです。

日米関係をみると、日米安保条約に名を借りた米軍の日本監視目的の駐留、 Guam移転費の天文学的経済負担など、アメリカの年次報告書に従わされて法律は次々と改悪され、過去には郵政改革の名目で国の安全基盤であった郵便貯

金をアメリカ金融資本に吸い上げられることになり、危ない牛肉までも食わされる事となりました。

こうした本質をマスコミは報道せず国民はなかなか真実を知る機会はありません。中国・韓国による歴史問題も、それに異を唱えることのできる生き証人である方々は、高齢化で次々に世を去りつつあります。だが、私を含めて戦後世代も、次第にインターネットなど様々な情報源から、少しずつではありますが事の本質に気がつく人が増えてきています。

いたずらに人種的対立を煽るつもりはありませんが、願わくは、日中韓諸民族のうちの心ある人々が、同じアジア人としての共通意識に目覚め、こうした白人国家群の積年の世界戦略に対する共通認識を持って欲しいと思います。このままでは白人国家にいい様に操作され、近隣諸国同士が果てしないいがみ合いを続けることになるのです。

広島、長崎を思うことは人の本質を真面目に考え、無^む幸^こなる(罪のない)被害市民に敬意を払いつつ、米国の狂気については恒久平和のため勇気を奮い食い止めなければなりません。だが、中国共産党の暴走も止まらずその狭間に立たされている日本国の舵取りは子供たちの未来に直結する大切なことなのです。

正しい歴史を知らない限り過去の悲劇は何度でも繰り返されます。一刻も早く歪曲された歴史を正し、その上で原爆投下という事実を見つめなおし、日本が何をなすべきかを考えなければなりません。日本に仮に戦火がおこるとしたら、単独でどこかの国が侵略してくる事は考えられず、米国の先制攻撃によって介入戦争がおこったときでしょう。

それが日本に及ぶと言うのがもっとも可能性の高いものです。国連はアメリカの言うとおりに兵士を派遣いたしません。そうすると米国の呼びかけに賛同できる国だけということになります。現在の政権が通そうとしている法案はまさ

第1部 平和祈念文集

<平和について思うこと>

に危ない選択となることでしょう。この火種をなくす事は、日本の恒久平和とアジアの安定に大きな役割を果たすと思います。

アメリカ軍が広島と長崎に原爆を落としたとき、人類は、自らを滅ぼす事の出来る力を手にしたことに気付きました。我々はたった1つの地球に暮らしているのです。60年代に宇宙から見た地球の写真を初めて見たとき、人間は、広大な無限宇宙の片隅で、小さな星を回る実に小さな惑星に寄り集まって住んでいる事を、写真を見て思い知らされたのではないでしょか。

今の世の中、人間関係が希薄になってきていますが、どうぞ市民の皆様におかれましては希薄になることないよう地域社会の絆を強固なものとしていただければ幸いに存じます。

平和について思うこと

橋本 小都美 (若松 在住) 2000年生

私は、平成26年に派遣中学生として広島へ行き、核兵器の恐ろしさについて学びました。

広島では、平和式典に参加したり、原爆ドームや広島平和記念資料館を見学しました。当時の資料や写真などが多数展示され、原爆による被害の大きさに息をのむばかりでした。特に胸を締めつけられたのは、被爆者の方々のお話でした。原爆が投下されたあと、焼け野原となってしまった広島の街や、痛みに苦しんだり、家族を探す人々の様子……。ひと言ひと言かみしめるように語って下さいました。もう二度とこの悲劇を繰り返してはいけない、と強く感じました。

また、全国から集まった同年代の子供たちと平和について考えるワークショップでは、「平和」と言う共通の願いで、同じグループになった子と、すぐに気持ちひとつになれました。一人ひとりの思いは小さくても、みんなで気持ち

を合わせれば大きな力になることを実感しました。先日、我孫子市内の小学校を対象に行っている平和事業の「リレー講座」に、アシスタントとして参加させていただきました。

歴代の派遣中学生による平和についての話を聞いた6年生の児童が、「平和」について自分にできることを一所懸命考えている姿が印象に残りました。その姿を見て、私も、今のこのあたりまえの生活は、「平和」の上に成り立っていることに感謝するとともに、この「平和」を守り、共に歩んでいけるよう、がんばっていきたいと思いました。

どんな恐ろしい出来事も、年と共に忘れ去られていく

誉田 まやみ (中峠 在住) 1974年生

ハリウッド映画の「渚^{なぎさ}にて」や「博士の異常な愛情」は、「核の恐ろしさや、核はこの世の終わりを招く」を訴えた映画として御存じの方もおられると思います。1990年(平成2年)、黒沢監督の「八月の協奏曲」では、観光客が長崎の平和公園を散策しながら、アイスクリームを食べたり、記念碑の写真を撮ったりしているシーンがあります。そのナレーションで「どんな恐ろしい出来事も、年と共に忘れ去られていくのです」と言っているのは、今、私達が直面する、戦争或いは核^{さんか}の惨禍の風化問題の核心を突いているように思えます。「会社は三代目が最も危機である」とも言われます。初代が苦労を重ねて会社^{おこ}を興し、初代の苦労を直接知る二代目は、初代の延長線上で頑張り、確実に会社を大きくして行くのが普通ですが、三代目は、出来あがった会社のトップに苦労知らずに座ることで、慢心が油断を生み、緊張感にも欠けて、やがて危機に突入することがままあると言われます。

戦争が終わって70年、終戦の年に生まれた人は70歳であり、戦争の記憶のある人は75歳、或いは80歳を超える歳となり、悲惨な戦争を直接知る機会が無くなりつつあります。どんなに悲惨な出来事であっても、いかなる過酷な加害者或いは被害者であっても、当事者でなければ実感がありませんし、伝

第1部 平和祈念文集

<平和について思うこと>

える事もありません。その肝心な語り部の人達が、あと僅かな人数となり、消滅の時を迎えつつあります。時は如何ともしがたく、いずれ零の日がきますが、広島原爆ドームや長崎平和公園、沖縄の平和の礎いしじ 或いはひめゆり壕等々の戦争の惨禍さんかを伝えるものがいくらでもあり、その気になれば悲惨な戦争を知る事は出来ます。

今現在は、戦争世代からは孫にあたり、三代目の時代となっています。格別な意識をしなければ、戦争の惨禍さんかは目の前をサッと通りすぎてしまいます。風化された戦争体験は、人々の目からは見えず、全く感じられません。苛めっ子は苛められている子の痛みが解らないとも言います。また、ナイフで手を切ると、次にナイフを扱う時は気をつけるように、痛みを覚えていて、常にフラッシュバックされることで、以後の行動に役立ちます。痛みを忘れた時、人は又間違いを犯します。間違いを繰り返さない為に、痛みを忘れない事が肝要になると言えるのではないのでしょうか。「どんな恐ろしい出来事も、年と共に忘れ去られていくのです」のナレーションそのままに、人々は、戦争と言う恐ろしい出来事を忘れ、ナイフで手を切った痛みを忘れてしまったように、三代目は先人の教えを無にし、同じ過ちを繰り返す愚行を犯そうとの雰囲気は徐々に大きくなり、平和の時を崩そうとしています。ナレーションの核心とはそのような事ではないのでしょうか。

しかし、戦争体験かたべの語り部があと僅かになったとは言え、まだまだその気になれば聴くことも、触れ合うことも可能なはずですが、更に全くそれらが不可能になっても、私達には、文章や記録によって、いろいろと知ることが出来ます。勿論文章や記録は生の体験談ではありませんが、体験を知るには何の支障もなく、気持ちの共有は出来なくとも、共感が可能です。問題は、戦争の体験を知ろうとの気持ちがあるかどうかの差です。それには自主的判断及び決断力や行動力が必要となります。

「8. 6ヒロシマ平和へのつどい2013パネルディスカッション」において、パネリストのオリバー・ストーンとピーター・カズニックは「勝者も敗者も歴史でウソをつく」と言っています。戦後における、日本と連合国側の視点の違いからも解るように、勝てば官軍で、勝者は自分に都合良いウソで歴史を

塗り固めます。敗者も都合の悪いことを隠し、時にはネジ曲げます。そう考える時、私達は、如何に自分主体に考え、勝者、敗者の都合の裏を読み取り、自分なりに考えを固め、どのようにすべきかを決断する必要があります。

自分で考え決断するには、まず「自己肯定感が必要」とされ、2つのタイプがあると言われています。1つは「自分の存在そのものへの基本的肯定感」、もうひとつが「他人の基準でしか肯定出来ない社会的自己肯定感」です。周りの評価を気にするのが後者で、偽物の自己肯定と言え、周囲に受け容れられてやっと生きる事が出来る乳幼児の感性と言え、自己への批判を容認できず、独善と激高が付きまといます。そして、真実を知ろうとする探求心を「自虐」と名つけたがる傾向にあり、その行為は偽物の自己肯定感の表れではないでしょうか。何事にも左右されない心の眼を持ち、決断し行動する事が求められているのが今日です。

真実の過去を知り、自分のものとし、過去を風化させず、過去に学ぶ、そんな心構えが、平和を築く第一歩であり、私達に課せられた行動指針ととらえる事が「どんな恐ろしい出来事も、年と共に忘れ去られて行くのです」のナレーションへの応えとすべきです。戦争の被害や加害の事実を知る事が、社会的自己肯定者に「自虐」と言われようとも、自分自身の意志で事実を知る事が、今私達に求められています。戦争の記憶がバーチャルであろうとも、リアルなものにする必要があります、それを実現し、戦争体験を風化させないことが、「どんな恐ろしい出来事も、年と共に忘れ去られていく」のを防ぎ、平和実現の糧かてになると信じてやみません。

広島原爆被災とその後

本田 弘（布佐平和台 在住） 1935年生

1945年8月6日に広島に原子爆弾が投下されて70年が経過した。当時、愛知県に住んでいた私たちの耳にも、あまり時を経ずして、「広島にB29が1機やって来て、落下傘に吊るされた新型爆弾を空中で1発炸裂させ、これによ

第1部 平和祈念文集

<平和について思うこと>

って広島市が全滅した」という噂が流れてきた。「その威力は凄まじく、2里離れていても、屋根瓦が吹っ飛んだ」というような話も聞かれた。

私は、名古屋市（当時人口100万人）の空襲を何度も見聞きしたが、B29が何百機やって来て無数の爆弾や焼夷弾を投下しても、1回や2回の空襲で街が消滅するようなことはなかった。それが広島（人口40万人）では、たった1発の爆弾で、街が消えて無くなったとのことである。名古屋での空襲を知っているだけに、いくら新型爆弾といっても、そのような破壊力は全く想像ができなかった。従来のもとの根本的に原理の異なる爆弾が使用されるなんてことは知る由もなかった。

広島市は1945年当時、全国で神戸市に次いで7番目に大きな都市で、造船所などの軍需工場があり、また西日本の本土防衛を総括する第二総軍司令部が置かれていた。私は空襲に関する報道を新聞やラジオでよく見聞きした。六大都市は京都を除き、6月上旬までに空襲で大方焼き尽くされた。その後は、地方都市が標的となり、次々と攻撃されていった。しかし、広島市が空襲に遭ったという報道はなく、不思議に思っていた。

米国はその頃、原子爆弾の開発が目途がついていた。五大都市は既に壊滅状態にあり、このため、早い段階で広島市を原爆投下の第1候補に挙げ、無傷のまま温存していたようだ。原子爆弾の開発は極秘中の極秘で、トルーマン副大統領でさえも、4月中旬に現職のルーズベルト大統領が急死するまで、原爆のことは何も知らされていなかった。その彼が、大統領に就任し、原爆の開発を知ってからわずか3ヶ月少々で、広島への原爆使用を命じた。

時は移り、1959年に私は学校を卒業して化学系の会社に就職し、岩国市にある工場に赴任した。休日にはしばしば広島へ出掛けた。戦後14・5年も経てば、多くの戦災都市は復興を果たしていた。しかし、広島市の復興はかなり遅れていた。爆心地の一带はそのまま取り残され、原爆ドーム近くにある川の土手にはバラック小屋が無秩序に建ち、うす汚い雰囲気漂っていた。

原爆ドームは周りに瓦礫がれきが散乱し、無残な姿で危なっかしく立っていたが、

その気になれば、誰もが中へ入られる状態にあった。私は瓦礫^{がれき}の山を踏み分けてドームに入り、鉄骨だけの丸天井や焼けてぼろぼろになった壁面をじっくり観察した。ドームは今にも崩れ落ちそうで怖かった。広島市ではその頃、市民の間で原爆ドームを取り壊すべきか、保存すべきかで意見が割れ、復興計画に支障が生じていた。当時、原爆ドームを「目障りだ」と感じていた人が大勢いたようだ。それにも拘らず、これを後世に歴史的遺産として残せたのは、多くの市民の熱心な保存活動のお陰であり、彼らの先見の明には頭が下がる。

繁華街にある都市銀行入口の石段には、人の上半身の影跡がそのまま残っていた。原爆投下時にこの石段に座って休んでいた人が原爆の閃光を浴び、その姿が石段に投影されたとのことであつた。気づかない人は、これを土足で踏みつけたであろう。後に、影跡を永く保存するため、その上にガラスの保護ケースが設けられた。

米国は人道主義を標榜^{ひょうぼう}してきたが、戦時には手段を選ばなかった。原爆被害者は、多くが非戦闘員であり、逃げる術さえ与えられず、一網打尽にされた。その中には、勤労奉仕に駆り出された若い中等学校生や高等女学校生も数多く含まれていた。爆心地から600メートル離れた場所で屋外作業をしていた、名門校の県立第一高等女学校の一年生（12、13歳）、223名全員が死亡した。心が非常に痛む。戦時中とはいえ、かかる無差別で非人道的な行為は、決して許されるものではない。

被爆関係者の話であるが、私と机を並べて仕事をしていた、被爆当時中等学校生だった先輩は、原爆投下に遭遇しなかったものの、直後に被災地に入って人を探し歩いた。そのため、原爆病の発症を常に心配していた。その彼もこの5月、84歳で世を去った。また、独身寮での後輩の話によると、当時県立第一中学に通っていた彼の長兄は、被爆してその晩、ぼろを纏^{まと}ったような姿で大竹町の自宅に辿り着いた。しかし、火傷が酷^{ひど}く、それから間もなく亡くなった。親しかったある熟年夫婦は、爆心地から500メートル離れた自宅で被爆したが、居場所が良かったのか、二人とも奇跡的に無事であつた。「爆心地から50

第1部 平和祈念文集

<平和について思うこと>

0メートル以内で被爆し、夫婦揃って30年も病気一つしないのは大変珍しい」と当局者に言われたそうだ。

私は広島平和記念資料館を見学したが、被爆の惨めさは目を覆うばかりである。特に、無残な被爆者の写真や模型、ぼろぼろになった衣服や靴、潰れた弁当箱や腕時計などが、その惨状さんじょうをよく物語っている。原爆の壮絶さ、残酷さは、直接目で確認しないと実感できない。内外を問わず多くの人が広島や長崎を訪れ、「被爆とは何か」を肌で感じ取って欲しい。

被爆当時、広島は放射能の影響で70年間、草木も生えないと言われていた。今年はその70年に該当する。しかし、広島は現在、木々に囲まれた平和記念公園に象徴されるように、緑豊かな美しい街となった。あの広島が不死鳥のようによくもこれほどまでに蘇ったものだと感心せずにはいられない。毎年、原爆投下記念日には広島市内の様子をテレビで放映している。特に、爆心地近くの河岸から、人々が平和への祈りを込め、数多くの灯籠を流すのは何とも言えない風情がある。

原爆ドームを背後に控え、灯籠の灯が川面に映える情景は、往時を知る私にとってはまるで夢の世界である。

未来を生きる子どもたちへ

的山 ケイ子（新木野 在住）1945年生

2015年2月、NHKで「立花 隆 次世代へのメッセージ ～わが原点の広島・長崎から～」が放送された。

立花さんは、長崎市生まれの74歳。被爆地に生まれた者として「今の自分に何ができるのか。」の立花さんの思いから、この番組はスタートしている。

同じ長崎市生まれの胎内被爆児の私。画面に引き込まれていた私に「あっ、立花さん私と同じだ」と、気づかせるところがあった。

立花さんは、大学生のころ原水爆廃絶をかかげ、広島・長崎の被爆写真や資

料を持ってイギリスやアメリカなどで原爆の悲惨さを訴えたそうだと。ところが、いくら原爆の話をして「話がつうじない。」と、以後、いっさいの活動から距離を置くようになったというのだ。

私にも、この「原爆の話がつうじない。」という、むなしい経験がある。

私は、我孫子市内で33年間、小学校の教員をやってきた。私が原爆の被爆者であることを知っている6年生の担任から「子どもたちに原爆の話をして」と頼まれたことがあった。その学年生は、3年生の時に私が担任したことのある子どもたちだったので、可愛い教え子のためと、初めて被爆体験の話をすることにした。

子どもたちは昔の担任の話を良く聞いてくれた。しかし、私は「話がつうじなかった。」と、すごすごと自分の教室に戻ってきた。初めての被爆体験談がつうじないもどかしさもあったが、私は、それ以上に被爆の話をする事で傷ついたのである。私は、自分の身の内から、はらはらと赤い血がしたたり落ちるような感覚を覚えた。

その頃、3年生の国語の教科書に教材として「夕鶴」という民話が載っていた。傷ついた鶴が、命を助けてくれた与ひょうのもとに、つうという女の姿となって現れ恩をかえす話である。つうは、愛する与ひょうのために、自分の羽を抜いて美しい白い布を織った。きっと、羽を抜くたびに赤い血が、はらはらとしたたり落ちただろう。

私も、愛する平和のために自分が傷つくことを恐れてはいけないのだ。被爆の語り部として頑張っている方々は、きっと、こんな思いをたくさん乗り越えて来られたのだろう。

でも、私は乗り越えられなかった。立花 隆さんと同じように、その後、被爆体験を話すことをやめてしまったのだ。

私は、退職してから「我孫子市原爆被爆者の会」の役員になり、被爆者の会の活動を手伝うようになった。定期総会の開催、毎年8月の「我孫子市平和祈念式典」の共催、市内全域から集まる「平和の折り鶴」のとりまとめと展示な

第1部 平和祈念文集

<平和について思うこと>

どをやってきた。

そんな活動の中、「今の被爆者の会に、私に、何ができるのか。」「被爆者の会としてやらなければいけないことは何か。」などに思いがいたるようになった。

やらなくてはいけないこと、もう、それはわかりすぎている。「人類史上初めて、世界で唯一、日本だけに投下された原子爆弾の脅威」それを次世代に語り継ぐこと、それしか被爆者の使命はない。自分の肩には、そんな重大な使命がかかっていると気がついて、それでも、なお私は被爆体験を語る事ができなかった。

私の長い沈黙を打ち破ってくれたのは、なんと、広島・長崎派遣中学生の若者たちだった。彼らは、被爆二世で

戦後 70 年
広島・長崎派遣中学生リレー講座
「未来を生きる子どもたちへ」

も、被爆三世でもない若者だ。彼らは、市内の小学校に出向き、派遣体験を堂々と話してくれている。彼らの姿を見て、被爆者の私が、かえって若者たちに教えられる思いだった。

私は、自分の壁を乗り越えても、次世代に語り継ぐために困難なことがまだある。それは、被爆者の高齢化である。我が被爆者の会の推定平均年齢も80歳を超え、被爆者自身の病気、家族の老老介護等で活動が困難である。会員数も年々減り続けている。

被爆70年の今年、素晴らしい計画が実行されている。

我孫子市が、平成17年度から毎年行っている広島・長崎派遣中学生による派遣体験リレー講座である。派遣を経験した中学生はすでに社会人、大学生高校生になり100人ちか



広島・長崎派遣中学生リレー講座の様子(27.6.20)

くの数になろうとしている。

この若者たちが原子爆弾の脅威、平和の大切さを、自分たちよりもっと若い次世代、小学6年生に語り継いでくれようとしている。高齢化する被爆者にとって、なんとありがたいことだろう。心からの感謝を贈りたい。

立花 隆さんは、番組の最後で長崎大学の女子大生の質問「被爆体験を話す。平和をうったえるなど、人が何か行動を起こすきっかけ、要因、人を巻き込むことについて教えてください。」に答えている。「被爆、平和だけでなく、何事にも人を巻き込むことが大切。自分のやりたいことに向かって、全体を持っていく。それには、熱意しかない。」「熱をもって語るしかない。」と。

広島・長崎派遣中学生リレー講座の活動はまさに人を巻き込む活動へと発展していこう。

派遣中学生の皆さん本当にありがとう。

戦争と平和について思うこと

～柱にめり込んだ機銃弾～

宮川 修（我孫子 在住）1947年生

私の故郷は伊豆諸島の面積3.7平方キロメートル、周囲12キロの小さな島です。現在の人口は540人ほどになり、過疎が進行しています。私が生まれた戦後の昭和22年頃は子供が多い家では12人、6人ほどが普通で我が家は4人でした。父は8人、母も8人の兄弟・姉妹でした。子供も労働力として期待された時代でした。父は小学生の頃に、九十九里浜の地引網へ出稼ぎに行かされました。当時の島の人口は1,000人以上だったと推定されます。戦争当時の伊豆諸島は、首都防衛の重要な拠点であり軍隊が駐留していたようです。小学生の頃、海辺の近くに島にはないような破壊された大きな建物の残骸や山の中に幾つもの堀があり「戦車壕」と呼んでいました。戦車の進行を阻んだり立てこもって反撃するためのものだったようです。家の近くには「防空壕」がありその中で遊んだりしましたが、親からは崩れるから入らないようにといわ

第1部 平和祈念文集

<平和について思うこと>

れ、また蛇がいたりしました。

先日、テレビで見たアメリカの資料館に保存されていたフィルムに、終戦間際の本土各地の爆撃と機銃掃射の光景が映っていました。飛行士は帰還後に戦果を報告するため、日本が抵抗力を喪失した状態にもかかわらず、無差別に空から虫けらの如く一般人を殺戮したと言っていました。かつて日本軍もアジア各地で殺戮を行ったということですが、戦争というのは何と人間を残酷に、理性を喪失した状態に貶めるものかと思わずにはいられませんでした。父は戦中には長男であり片方の目が見えなかったことから、軍隊に召集されないでいたようです。やがて米軍が本土を爆撃するようになると、静かな島も例外ではなくなってきました。あるとき家で昼寝（夜に漁へ出るため）をしていると、突然バリバリという音がして部屋の柱に銃弾がめり込んだとのこと。父は運よく怪我はなかったのですが、その柱の痕は家が建替えられた昭和55年まで残っていました。母は姉と兄を抱え、連絡船で隣の島へわたるとき、突然空から飛行機が現われて機銃掃射を受け、もう駄目かと思ったそうです。終戦間際になると、女性と子供は島から離れ疎開するようになり、母は子供と伊豆の稲取に避難しました。父は島の何人かの人たちと軍に召集され、小笠原諸島に派遣されました。父が30歳、母が25歳の頃です。間もなく終戦となり、父は無事に帰島しました。よく大人たちが、硫黄島へ行っていたら全滅だと言っていたのを覚えています。親戚の漁師のおじさんは、お腹を見せてここに鉄砲の弾が入っていると仰っていましたが、90歳近くまで長生きしました。また母の兄は満州（中国東北部）にわたり、開拓団の一員として働いていましたが、終戦の際にはソ連（現在ロシア）に連行されシベリアで重労働に駆り立てられたそうです。戦後何年かして帰国した姿は、ミイラのように痩せこけていたと母は言っていました。不思議なもので、その苦労したおじさんも90歳まで長生きしました。私が就職してから、同じように抑留されていた方が職場に何人かいました。収容所の重労働、寒さ、食糧不足、日本人同士のいがみ合い、告発などの経験談を聞かされました。ある方は、艦艇が潜水艦に撃沈されて、海上を浮遊しているとき運よく仲間に助けられたと。一方、中国大陸では悪いことをした、今になってみると本当にすまなかったと思わずにはいられないと。日本人

は威張っていて、中国人を馬鹿にしていたと。

お盆になってお墓参りすると、墓碑には元陸軍上等兵〇〇〇〇の墓というのが目立ちました。この小さな島からも多くの若い人たちが、自分の意思にかかわらず国のため戦地に赴き、命が消耗品のように扱われ、無言のまま帰島し英雄として祀^{まつ}られていると思うと万感の思いに駆られます。本家の曾祖父は、日露戦争で功績をあげ勲章をもらったと見せてもらったことがありました。私は70歳を迎えるようになる今、息子や嫁、孫のことを思うと、父や母のような体験をしないですむように願わずにられません。日本は二度と戦争はしない、平和を願う国であることを世界に知ってほしいと思います。

あの戦争で失われた多くの命を決して無駄にしないためにも、今私たちができる務めとして過去の悲惨な出来事を語り、記録を将来に引き継ぐことが大切だと思います。

うりずん

深山 栄子（中峠 在住）1950年生

沖縄では、若夏の頃に降る慈雨を「うりずん」と言います。1945年の「うりずん」は様子が違っていました。慈雨ならぬ「鉄の暴風」が吹き荒れたのです。海のかなたのニライカナイ（豊穰・生命の源をもたらず神域）からは神ではなく、米軍が大挙して押し寄せ、島は艦砲射撃で全てが破壊されました。森も畑も家も人も、地上に在る物全てです。艦砲射撃後の米軍上陸で、軍民ともに追い詰められ、摩文仁の崖から身を投じる者、壕内で自爆する者など数多あり、県民の4人に1人が犠牲になった戦禍は筆舌に尽くし難く、今の沖縄はそれらのうえに成り立っています。

私の義兄で、沖縄の詩人、日本詩人クラブ、日本現代詩人会会員の星雅彦が、2014年に発表した詩集「艦砲ぬ喰え残さー」の中の一編を紹介します。

第1部 平和祈念文集

<平和について思うこと>

「艦砲ぬ喰え残さ一」 かんぽう くえ ぬく

今だから 笑えるが
笑いが 石垣に 張り付いていて
言葉を失うときがある
張り付いた言葉が
自虐的だとか
心に響く
生きていることの
喜びがあるから
砂浜の海岸で
すてきな春の香りと共に
ふと叫んでみる
天皇陛下 バンザーイ・・・
もう逃げ場がないときに
カミソリで首をかき切り
血の飛沫ひまつ
弟と妹の頭を
こん棒で叩き割り
両親の胸や腹を
ごぼう剣で突き刺し
崇高な命をすうこう
誇らかに捧げようときさ
明るい陽射しに身を曝しひざ さら
海ゆかばを歌い
万葉時代の気持ちになって
死ぬことは御国のためだと思い
誇らかに 感謝 感謝こそすれ
両親の微笑みに
大粒の涙を流し

この世の別れを
悲しみつつ
惜しみつつ
無差別の
射撃音におびえ
地響きと共に
ああ死ぬときが
やってきた・・・
優しさを
かぐわしさが消えさる
そのとき 生きる力よ
艦砲ぬ喰え残さー
忘れずに 伝えておこうよ
いつまでも

詩集は、大半がこのような詩で埋め尽くされており、戦後70年経った今でも、沖縄では戦争体験の詩が生まれています。特に、この「艦砲ぬ喰え残さー」は沖縄戦の悲惨さを伝えるもので、きつい表現もありますが、これ等に眼をふさいだりしては、本当の姿は解りません。今も沖縄は沖縄戦の延長線上にあり、現在進行形とも言え、戦争を語り継ぐ事で、平和を求め続けています。

しかし、私達が住む日本本土では、戦争のあった事すら忘れ、一部には戦争に向かおうとの動きさえあります。戦争の無い、平和に慣れきった私達は、70年前の悲惨な出来事を忘れかけています。平和な生活を望むなら、悲惨な時を忘れてはなりません。もう一度この詩を読み返して下さい。何度も何度も読んで下さい。そして、平和の大切さを噛みしめ、平和の大切さを感じて下さい。

第1部 平和祈念文集

<平和について思うこと>

馬鹿な大将敵より怖い、その大将誰が選ぶ。

深山 恒男（中峠 在住） 1942年生

「馬鹿な大将敵より怖い」は、バブルに踊らず堅実経営をした、ある銀行頭取が、バブル崩壊で大穴を空けた多くの銀行経営者を皮肉った言葉である。馬鹿な経営者をもった従業員や株主の困窮ひとしお一入であり、又更に、私企業にも拘かかわらず、経営立て直しの為に国費をつぎ込んだことは、国民も被害者と言える。しかし、会社選びに於いて、経営者が馬鹿かどうかは入社時には判別し難く、勿論経営者を選ぶ権利はない。会社員人生は運次第である事は如何とも成し難い。株主には総会があるだけ益ましである。

翻ひるがえって、民主主義政治は選挙によって成り立っている。会社の社長と違って、国の大将は選挙によって選ぶことが出来る。「カニは甲羅こうらに合わせて穴を掘る」とか「この程度の政治家にこの程度の国民」と言われるように、政治家の善し悪しは、国民の民度に比例する。平和を求めるか否かは、国民の気持ち次第で決まります。

稀代きだいの悪人ヒトラーは、ある日突然天から降って来たものでもなく、地から湧いたものでもない。国民を差し置いて勝手に総統になったのではない。選挙によって国会議員となり、徐々に政権を手に入れて行ったのであり、民主主義は機能していた。当時のドイツは、第一次世界大戦による多額の賠償金に苦しみ、世界恐慌が追い打ちをかけ、国民は苦しみから逃れさせてくれそうな政治家を渴望かつぼうしていた。ヒトラーは、世界の金融はユダヤが握り、ドイツ国民はその犠牲けんでんになっていると喧伝、国民は一挙に支持、アッと言う間に総統になり、気がついたら戦争の中にいたもので、ヒトラー誕生は必然性すら覚える。とは言え、ヒトラーを許せるものではないが、その馬鹿な大将を選んだのは国民です。

戦前の日本も、曲がりなりにも選挙制度があり、政治家は国民が選んでいた。しかし当時の日本は、日清・日露の大戦に勝利し、国民全体が戦争すれば勝てそうな雰囲気を持ち、威勢の良い政治家の言葉に踊らされ、気がついたら抜き差しならない所に立たされていた。戦争の指導者は、ドイツ同様日本国民が選んだものです。当時の日本の立場から、色々考えさせられる事もあるが、無謀

な戦争に突き進んだことだけは事実であろう。日露戦争では、戦争の終結時期・方法を、戦争を始める時に考えており、タイミング良く勝ち戦で納めたが、長引けば敗戦は必至とされています。先の大戦では、ダラダラと戦線は拡大、南の島では、兵站^{へいたん}を断たれた兵士が、戦死者より餓死者が多かった。東京大空襲・沖縄戦・広島・長崎及び各地の空襲被害は、戦争さえしなければ無かった出来ごとです。これ等日本に於ける戦争被害を知り、平和の大切さを求めるのは大切ですが、同時に加害者である事も忘れてはならない。被害のみの強調は、先の大戦を意義歪曲化させる場合があります考慮を要する。自国を一等国とした日本、日本の存在を不都合とした米国、民族差別混沌の戦前に於ける日本外交は稚拙^{ちせつ}で、マッカーサーに精神年齢12歳と言わしめた程で、子供が勝算もなく感情だけが先走り、大人に喧嘩^{けんか}を仕掛けたものであった。当時の欧米側指導者の対独・日戦争観は、ドイツは自分達と同じ成熟した大人で確信犯、日本は未成熟な大人面した刹那的^{せつなてき}の少年犯罪だと論じています。

現在の日本は、諸説はあるものの、平和憲法のもと、70年間戦争をすることなく、他国民を一人として殺さず、日本人も戦死せずに来ました。しかし雲行きは少しずつ変わりつつあります。平和憲法は形骸化^{けいがいか}され、改憲の流れも少しずつ強くなっています。広島・長崎を知って、平和の尊さを学び、平和を願うのは大切ですが、平和を思うだけでは成就しません。思うだけならば、何もしないのと同じです。

総選挙・通常選挙はせいぜい60%前後、地方選挙では30%を切る程の投票率は、とても民主主義^{ひょうぼう}を標榜出来る数字とは言えません。投票しない人は、白紙委任をしていることになり、政権党が何をしても賛成しているものと同じであり、如何に意にそぐわない政策でも受け入れざるを得ません。時の政府が、戦争政策を進めても反対出来ません。「私は戦争に反対だ！」と騒いでも、賛成した以上従わざるを得ません。戦争になっても、賛成した以上戦地に赴き戦い、戦禍は免れません。戦中世代の大人が「何故戦争を止められなかったの？」と子供に問われ、「情報も無く、ものも言えず、いつの間にか戦争になっていた」と答える様子が思い浮かびます。戦争は、いつの間にかではなく、兆候があります。軍靴^{ぐんか}の音は、遠くからも響きます。近づく前に対処するべきで、聞こえ

第1部 平和祈念文集

<平和について思うこと>

でも聞こえない振りではなく、聴く耳を持つべきなのです。

広島・長崎・沖縄、更に東京大空襲や多くの地方都市の空襲、南方での悲劇を知り、加害者であることを学び、そこから行動につなげなければ、平和は続かず、訪れもしません。耳を澄まして軍靴の音を聴こう。そして選挙に行こう。選挙で平和を目指す人を押そう。それが積極的平和主義だ。

戦争と平和について思うこと

～空爆の恐怖と食糧難を乗り越えて～

森川 アヤ（つくし野 在住）1925年生

（聞き取りによる寄稿）

私は知人に進められて、聞き取りボランティアの方のご協力いただき、主に終戦間際の空襲の体験と戦後の食糧難、子育ての大変さについてお伝えしたいと思いました。

終戦の前の18歳の頃、私は横浜市の戸塚にある日立製作所の研究所で部長の秘書として働いていました。とても大きな会社でした。当時会社は無線機を製造していて、女性従業員は神風のはちまきをし、もんぺをはいて徹夜を何日もしながら頑張っていた。製造が追いつかない状態が続いていました。周りには日立の大きな病院や元料亭の立派な会社の宿舎（寮）があり、私はその宿舎に入っていました。

本土の空襲が始まると、この辺りにもB29爆撃機が地上すれすれにたびたび飛来するようになり、爆弾投下が激しくなりました。会社の中のあちこちに防空壕がつくられていて、すぐに避難できるようになっていました。今考えると防空壕に避難していなかったら、きっと助からなかったという思いがよぎります。空襲を避けるため、出身地の新潟の柏崎へ疎開することになりました。ここでは空襲はありませんでした。そして間もなくして、和裁の得意な叔母の家で終戦を迎えることになりました。突然やってくる飛行機からの爆弾はもう心配しなくてもよいと思うと、心底ほっとしました。

横浜へ戻って会社に復職すると、運よく病院や宿舎は焼け残っていました。それにしても戦争で多くの人が亡くなり、またせっかく築いた家や財産を失うことになり、これからは決してこのような悲惨なことを繰り返させてはいけないという思いを強くしました。

昭和21年、私は結婚することになりました。相手は同じ会社にて勤める男性で職場結婚です。新婚時代ですが、思い出すのは、まず食べ物に苦労したことです。主人はリュックを背負って、農家へ米や野菜の買出しに行きましたが、お金ではなく着物や其の他のものでないと、なかなか売ってくれませんでした。かぼちゃを交換するだけでも大変です。米となりますと、やっと農家で交換しても警察官の厳しい監視を逃れるのに神経をつかいました。食糧難の時代であっても、政府は闇取引は厳しく禁止していたからです。間もなく私が妊娠し、お産のときになって姉が細長い袋に米を詰め、自分の腹に巻きつけて持ってきてくれました。姉にも小さな子どもがいたのに、このときは本当に嬉しくて涙がでました。姉妹はいいものだと思います。主人も同じようにお腹に巻きつけて米を運びました。やせていた主人は、あまり目立たなかったのが幸いしました。

子どもが産まれても、食糧難は暫らく続きました。大根一本を半分に小さく刻んで、一合のお米と炊きました。今思うととてもたべられたものではありません。子どものおやつもありませんでした。私は三人の子どもに恵まれましたが、この終戦後の数年は子どもを育てるのが大変な時代でした。生きていくためには、食べなくてはなりません。しかし食べる物が、手に入らない時代でしたから、子どもの多かったお家は大変だったと思います。主人は55歳で心臓麻痺で急逝しました。この頃の苦労が影響したのかと思うと、申し訳ない気持ちになります。

今の平和の時代を生きている自分の孫たちを見るにつけ、幸せな時代がきたことがうれしくて仕方ありません。この幸せがこの先ずっと続いたら、戦争や栄養不良で亡くなられた多くの方々に報いることになるのではないかと思います。5年後は東京オリンピック、パラリンピックの年です。今90歳の私ですが、その年齢まで生きて、世界の平和の姿のお祭りをこの目で見たいと思います

第1部 平和祈念文集

<平和について思うこと>

す。

(文責) 聞き取りボランティア 宮川 修 重田 幸子

◇聞き取りボランティアとして感じたこと

聞き取りボランティア 宮川 修 (我孫子 在住)

私はかつて役所に勤務していたとき、総評代表団の一員として20歳で本土返還前の沖縄を訪問し、ひめゆりの搭、^{まぶに}魔文仁の丘、米軍基地等を視察する機会を得ました。現地で多くの記念碑を目の当たりにしたとき、戦争の残した痛ましさを厳しい思いで受け止めました。亡くなられた方々の無念さを私なりに考えたとき、繰り返してはいけない歴史の教訓を伝えなければならないと思いました。その後役所で平和事業推進担当課長として広島、長崎に出張し、原爆被害の悲惨さを写真や模型で身近で学ぶことができました。また市民の「戦争体験集」を企画、発行することも経験しました。

今回、私がボランティアに応募したのは、退職して8年となり少しでもお役にたてればと思ったからです。

◇森川さんにお会いして

聞き取りボランティア 重田 幸子 (我孫子 在住)

森川さんにお話をうかがった10月6日、我孫子北近隣センターつくし野館の窓からは少し色づき始めた街路樹が見えていました。娘さんと一緒に来られた森川さんは、勧められてきたので特別話すことは無いのだけれど・・・としきりに言われました。いろいろお話するうちに実家を離れて就職した工場と寮のこと、男性は出征し若い女性が大勢働いていたこと等を話してくださいま

した。終戦後の混乱の中での結婚生活や子育ては食糧難の時代でした。「お父さんは買い出しで頑張ってくれた。55歳で亡くなったのはその頃の苦勞のせいだと思う」と寂しげにおっしゃいました。

偶然、私の父と同じ会社の別の工場に勤務しておられたのでした。食糧は配給制でしたから父も家庭菜園で野菜や芋類を沢山収穫して養ってくれたことを思い出しました。

「今は平和で本当に嬉しい、5年後のオリンピック・パラリンピックは是非見たい」とやっと笑顔になられたのが印象的でした。もしかしたら思い出したくない戦中・戦後だったのかもしれませんが。

核廃絶への私の思い

和田 三千代（天王台 在住）1935年生

広島

私は今年も8月4日から6日まで広島へ行きました。今までの記念誌にも書きましたが、私の父は出張先の広島で原爆を受け、即死ではありませんでしたが、8月18日に旅立ってしまいました。私が国民学校4年の夏でした。

我孫子市消費者の会で、2000年に会員から募集した「戦争の記憶」を出したこともあり、市の平和事業には委員会ができた時から関わって来ました。

今年の広島は、戦後70年の節目と言うこともあり、平和祈念式典には昨年より1万人多い、5万5千人が参加したと報じられました。この報告は、24人が参加した中学生にお任せします。

意見広告の会

上記の理由から私は核問題、放射能問題に敏感で、チェルノブイリの原発事故の時は、東京の友人たちと「原発と核をなくす女たちの会」を作り、全国から参加費を募って新聞や週刊誌に参加者の名前を記入した「意見広告」を掲載しました。今では当たり前になった一人ひとりの名前を記した意見広告のスタイ

第1部 平和祈念文集

<平和について思うこと>

ルは、この時が初と言われました。我孫子の友人たちの名前もずいぶん載りました。報告書「わいわいがやがやの記」（昭和61年11月26日発行）の私の文を転載します。お読みください。

「原発・原爆いやなものはいや！」広島原爆で父を失い、二次放射能の影響からか、20年後肺がんで母を失った私に、ピッタリの言葉でした。

科学の進歩を否定するものではありませんが、「人間を幸せにする科学なのかどうか」で判断したいのです。原発も原爆ももちろんノー！。ノー！。

一口千円のカンパを寄せることで、自分の中にはっきり原発反対の意思を確認し表して下さった方々の、この思いがけない人数（5,724名）、全国津々浦々の女たちの切実な思いを、痛いほど感じながら、仕事を手伝わせてもらいました。

原発をなくすため、次に何ができるのか、何をしなければならないのかと、考えています。ねばり強く、みんなと一緒に。

福島夏

我孫子市消費者の会の行事ではありませんが、有志の旅行としてこの3年「東北を忘れない旅」を実施しています。最初の年が津波の被害が大きかった名取市閑上地区、2年目は、原発事故の避難者の多い会津地区、今年は常磐道が通行可能になった福島浜通り地区へ。

8月24日、いわきから案内の方にバスに乗っていただき、檜葉町、富岡町、大熊町、双葉町、浪江町を通過して説明をいただきました。檜葉町は9月6日に避難解除地区に指定されました。そこの宝鏡寺の和尚さんのお話を聞きました。

「除染は家の周り20mだけ。子どものいる家庭は帰ってこない。しかし帰る人がいれば、寺は帰らなければならない。除染したと言っても山は出来ない、雨が降れば放射能は流れてくる、と。一度事故が起これば取り返しがつかないのに、川内原発の再稼働をした。日本人は何を考えているのか！」と力のこもったお話でした。

大熊町、双葉町、浪江町と国道を北上しました。車の窓を閉めて通過することが出来ました。しかし国道から中の道に入ることは許されていませんので柵

があり、進入する人を防ぐ見張りが立っていました。バスの中の線量計が5.8マイクロシーベルトを示しているのに、見張りの人は普通の作業服にマスクだけ。この方達の健康はどうなるのかと、胸が痛みました。黒い袋に入れられた除染物があちこちに積み上げられ、一部は破損していました。今日も都会では夜景が素晴らしいとテレビが伝えますが、福島の実態を国民はもっと知るべきだと思いました。

核廃棄物の後始末もできない科学が現実です。戦争の体験を話せる方も少なくなっています。人の生命が一番大切だと、その方向へ進んで欲しいと願うばかりです。